

# 中田重治とメソジスト

原田 彰久

## 序

今年の中田重治が、1901年、神田神保町に「中央福音伝道館」を始めてちょうど100年を迎える。これをおぼえて、去る5月21日から22日にかけて、中田重治宣教100年記念大会が開催された。

この数え方に異議を唱えるわけではない。しかし、中田の人生からするならば、この出来事は、必ずしも宣教を開始した年とは言えない。むしろ、中田にとっては、それ以前と連続した働きであったと言えよう。

つまり、中田の「中央福音伝道館」での働きは、メソジスト監督教会（Methodist Episcopal Church）の伝道者としての歩みの延長線上にある。

しかし、とかく中田と言えば「ホーリネス教会」の監督という事実とそれから生じたレッテルによって、彩られてきたように思われる。

そこでは、メソジスト派の伝道者であったことや、ウェスレーとのつながりは、いわば「刺身のつま」のようものと見られてきたと言えよう。それは、メソジスト派側ばかりでなく、ホーリネス派の人々においてすらそうだったのでないか。

しかし中田は自らの立場を「初代メソジストの教義」<sup>1</sup>と述べている。この点を我々はこれまでどのように理解してきたであろうか。

また、中田の働きを振り返るとき、アメリカにおけるホーリネス運動とき

---

<sup>1</sup> 東洋宣教会機関紙「焰の舌」大正5年10月5日、第522号、1頁

わめて密接な関係があるが、これまで、中田がアメリカで受けた影響の歴史的、宗教的背景については、十分検討されてきたとは言い難い。

かつて、日本ナザレン教団の瀬尾要造は「アメリカにおけるメソジズムの伝統を中田重治がどう継承したか、これらは今後の検討課題である」<sup>2</sup>と述べていたが、日本でも近年、ウェスレーにつながる流れを再検証する動きが起こってきているように思われる。

ウェスレー・メソジスト学会の設立において、メソジスト教会関係者のみならず、ホーリネス派からも参加者があることはその証左と言えるのではないだろうか。

そこで、このレポートにおいては、あらためて、中田重治とメソジストとの関係を検証してみたい。これにより、日本におけるウェスレーやメソジスト派にかかわる流れを振り返る一助となれば幸いである。

なおこのレポートは、筆者の東京神学大学における卒論の一部を用いて再構成したものである。

## 1 中田重治とメソジスト監督教会

中田重治は1870（明治3）年青森県弘前市に生れた。6歳頃から母に連れられてメソジスト監督教会弘前教会に通うようになる。中田がいつ洗礼を受けたのかは、はっきりしていない。<sup>3</sup> 1886年ないし1887年に宣教師ドレーパーより洗礼を受けたと言われている。

1888年に弘前の東奥義塾を卒業し、東京英和学校（現青山学院）に入学したが、卒業試験に及第出来ずに退学処分となった。

退学の背後には、リベラル神学一辺倒の授業内容に不満を覚えたためとも言われている。

その後、校長であり、弘前教会における恩師でもある本多庸一の計らいで、メソジスト監督教会の信徒伝道者として、北海道の八雲や千島列島のエトロフ島で伝道した。

---

<sup>2</sup> 中田重治に学ぶ会編集委員会「源流第2号」昭和50年、22頁

1894年7月8日、中田は、アメリカの監督であったナインドから按手を受けて、執事教職となる。

それは、函館連回（District）の保挙により、また宣教師ソーパー（Julius Soper）の動議による。<sup>4</sup>

中田は、中退者であり、元来、教職試験を受ける資格が無かった。しかし信徒伝道者としての働きが評価されて按手を受けたのである。

ところで、メソジスト監督教会は執事、長老、監督のいわば三重職制であり、執事教職に聖餐礼典の執行権はない。また、年会は長老教職によって構成されるため、中田は、年会の構成員ではない。それゆえ1901年に「中央福音伝道館」を起こすにあたって、中田はメソジスト監督教会をやめるのだが、年会記録には一切出てこない。

『中田重治傳』には、中田が按手を受けたと記されてはいるが、それが執事按手であったことについては、これまで、さして問題になったことはない。これは、ホーリネス派において、メソジスト派の職制が理解されてこなかった結果である。

1896年、大館教会を牧会していたが、偉い伝道者になるという野心をもってアメリカで学ぶことを決意した。そして、見送りに来た本多庸一から自分のコートをプレゼントされて、横浜から出帆、シカゴのムーディー聖書学院で学び、1898年、短期コースを終えて帰国した。

1899年の年会でメソジスト監督教会の福音遊説者（巡回伝道者）になった。これも小方仙之助とソーパーの動議による。<sup>5</sup>

このように見てくると、ある意味で、1901年以前の中田の伝道者としての歩みは、メソジスト監督教会にあっては、例外的な存在であったと言えよう。

---

<sup>3</sup> 米田勇『中田重治傳』昭和34年、24頁

<sup>4</sup> 美以教会第十一回日本年会記録、1894年、14頁

<sup>5</sup> 美以教会第十六回日本年会記録、1899年、18頁

## 2 ホーリネス運動

ここで中田が影響を受けたホーリネス運動について見ておきたい。

### 第二次大覚醒運動とホーリネス運動

ホーリネス運動は大別すると、二つの起源を持つ。一つはピューリタンであり、もう一つがメソジストである。

ホーリネス運動の研究書として代表的なものに、M.Dieter による“*Holiness Revival of the 19th Century*”があげられる。

ディーターはアメリカの大覚醒（リヴァイバル）運動の視点でホーリネス運動を述べている。そこでは、C.G.フィニーらのオベリン神学を取り上げることから始まる。つまり、カルヴァン主義ないしピューリタンにおける、よりきよい（ピュアな）生活への希求がホーリネス運動の発端とされている。

それと共に、特に第二次大覚醒運動における予定説への反発を考慮する必要がある。そこでは、例えば、C.G.フィニーについてアルミニウス主義の影響との評価も示されている。<sup>6</sup>

つまり、第二次大覚醒運動は、19世紀のアメリカ合衆国を舞台にしたカルヴァン派の一部やメソジスト派、その他の教派を巻きこんだ「反予定説連合」という色合いを持つものである。

そこにおいてピューリタンにおける「きよい生活への希求」とメソジストにおける「完全論」とが互いに影響を与えあう中でホーリネス運動が展開していくことになるのである。

しかし、今日でも、ウェスレーの完全論を論じる時に、「人間の在世中における完全は可能か」という議論がなされるが、同様に、当時でも、ピューリタンのホーリネス運動とメソジストのホーリネス運動とは、ホーリネスの理解に相違があると言われている。今日、日本でも開催されている「ケズィック・コンベンション」は概して、前者の立場に立つことが知られている。

さらに第二次大覚醒運動においては、信仰者の自発性あるいは自覚的信仰

---

<sup>6</sup> 棚村重行『現代人のための教理史ガイド』教文館、2001年、297頁

が強調されるが、そこには大陸における厳しい迫害の後に、アメリカに移住してきた、再洗礼派やバプテスト派における「自覚的信仰者」のモチーフの影響が考えられる。

### メソジスト・ホーリネス運動

ホーリネス運動の中でも、メソジスト派のホーリネス運動は、完全論の教理や経験がメソジスト派内で軽んじられているという状況判断を反映している。<sup>7</sup>

1830年代に、メソジスト派の信徒であった S・ランクフォード (Sarah Lankford) と姉妹のフィービー・パーマー (Phoebe Palmer) が「ホーリネス振興のための火曜日集会」を行っていた。

南北戦争後の1867年、メソジスト監督教会の牧師である J・A・ウッドらによって「ホーリネス振興のための全国キャンプ集会連盟」(National Camp - meeting for the Promotion of Holiness) が創立された。これは、アメリカ中西部の開拓地を中心に行われていたキャンプ集会を特にホーリネスを強調するために用いるものである。

1880年代にはホーリネスの経験が可視的教会の会員資格であると考え、既存教会からの分離を強く主張する「出てこい主義者 (Come-Outers)」が現われた。<sup>8</sup> これが、小グループないし単立のホーリネス教会となっていく。

1890年代半ばには、メソジスト教会から出る (Put-Out) 形で新たなグループを形成する者たちが現れた。彼らは出てこい主義者には批判的であり、教会に忠実な人々であったが、次第に独自のグループを形成せざるをえなくなった。<sup>9</sup> 後のナザレン教団や中田重治に影響を与えた人々もこれに属する。

つまり、歴史的には、当初、メソジスト派の内部改革運動であったものが、次第に超教派運動となり、さらに新しい教会集団の形成へと展開していった

---

<sup>7</sup> Charles Edwin Jones, "Perfectionist Persuasion", Metuchen, N.J., 1974, pp.2 - 3

<sup>8</sup> Melvin E. Dieter, "Holiness Revival of the Nineteenth Century", Lanham, Md. 1996, pp.230 - 233

<sup>9</sup> Dieter, *Ibid.* pp.262 - 265

のである。

### 祭壇神学 - メソジスト・ホーリネス運動の教理的特色

メソジスト・ホーリネス運動のホーリネス理解には、フィービー・パーマーの影響が大きい。

ウェスレーの完全とは、神をまったく愛することであり、神と人との関係の回復である義認とは区別される。それは義認と表裏の関係にある新生に始まる聖化の過程における人間の実質の変化である。

完全はこの世において、恵みにより信仰によって即時的に与えられることが期待できる。<sup>10</sup> その後完全な人々も永遠にいたるまで漸次的な過程を経て恵みに成長できるが、完全を喪失する可能性もある。その意味で「キリスト者の完全」の教理は非常に複雑な内容となっている。

これに対して、パーマーは過程としての完全を見落とし、ホーリネスの即時的な経験のみを強調して単純化した。そしてホーリネスをメソジスト派の信仰生活における万能薬のようにみなした。これによりウェスレーの完全とは異なるものとなったと言えよう。

それは、今ここでの決断であり、神への献身あるいは自己犠牲である。具体的には、ホーリネス・キャンプ集会等で用いられた「恵みの座」あるいは悔悛者の席 ("Mourner's Bench") に進み出て、自らの罪を告白し、献身を公に表明することである。

これは、神の祭壇に自らをささげることであるという理解から「祭壇神学」 ("Altar Theology") と呼ばれた。

また、パーマー以後のホーリネスの説教者は、キャンプ集会でのこの経験を出エジプトの出来事やジョン・バニヤンの『天路歷程』 ("*Pilgrim's Progress*") になぞらえて説くようになった。すなわち、紅海渡渉が水のバプテスマであり、40年の荒野の旅路が、ウェスレー主義的な新生・聖化の救済過程である。そしてヨルダン川渡河がホーリネスの経験であり、この経験に与かった者は「約束の地」に住まうのと同様に、すばらしい信仰生活を歩むと考

---

<sup>10</sup> J・ウェスレー 『キリスト者の完全』日本ウェスレー出版協会、1963年、94頁

え、それをカナンあるいは「ベウラの地」<sup>11</sup>と呼んだ。

そのような意味で、今日、19世紀のメソジスト・ホーリネス運動におけるホーリネス理解は、ウェスレーの完全論そのものというよりも、その一変化した形態とするのが妥当ではないだろうか。

これは、ルターとメランヒトン派の相違、あるいは近年研究が進んでいる、カルヴァンとカルヴァン主義の相違と同様であろう。後継者が、きちんと継承したか、その点が問題である。

ここで、ホーリネス運動が、ウェスレーの完全論を正しく継承していないという批判も可能である。しかし同時に、19世紀にも指摘されてきたように、メソジスト派はウェスレーの完全論を、誠実に継承してきたか、とも問わざるを得ないのだが。

#### メソジスト性の喪失と回復としてのホーリネス運動

メソジスト・ホーリネス運動は、当初、メソジスト教会の内部改革運動であった。そこでは、メソジストとは何かという、根本的な問いがあると言えるよう。

ここでメソジストとは、教会論における「包括性」と救済論としての「完全論」という二つの中心を持つと表現できる。

「包括性」はメソジスト宗教箇条にあらわれている。

そこでは英国国教会と同様、いわゆる他の宗教改革者と異なり、宗教箇条への同意であって、ウェストミンスター信仰告白のように拘束されない。<sup>12</sup> またメソジスト教会は国教会ではない。つまり、非信条主義、非国教会主義こそが、メソジスト性の特色である。

ここでは非信条主義であって、反信条主義ではないことに注目しなければならない。バプテスト派等にあっては、使徒信条すら忌避する傾向がある。一方で、メソジスト派にあっては、英国国教会と同様、古典信条は告白すべ

---

<sup>11</sup> ジョン・パニヤン『天路歷程』（パニヤン著作集）、山本書店、1969年、229頁

<sup>12</sup> 宗教箇条の問題については、八代崇『イギリス宗教改革史研究』創文社、1979年、183 - 184頁を参照。

き信条である。

この点では、ウェスレーの「“純粋な神の言葉”は説かれていないし、聖礼典も“正しく執行されて”いない」としても必ずしも公同教会から排除するものではない、という柔軟包括的な教会理解が背景にあると言えるのではないだろうか。<sup>13</sup>

次に、メソジストとは「聖書の聖化を国中に広めること」<sup>14</sup>とされており、完全論が、もう一つの中心を占める。

しかしここで、聖書の聖化するわち「完全論」は宗教箇条に含まれておらず、教会の法的根拠、また教会員資格の要件になっていないということが重要である。

ここでは、完全論を受け入れていなくても、メソジスト教会の会員になることができる。また宗教箇条に同意すれば、メソジスト教会の教職にはなれるのである。

それゆえ、メソジスト派内部で「完全論」が失われたとしても、教会の法的な存立基盤には、なんら影響はない。

この状況において、ホーリネス派の諸教会は、先に述べたように「ホーリネスの経験」を教会存立の法的な基盤にした。

この点について、例えば日本ホーリネス教会会則によれば「我等八……其原罪八……全ク除カル、事ヲ信ズ」（第二条、第二項）とホーリネスの教義を明記し、「本会八第二条ノ信仰ヲ有スル教役者及信徒ニ由リテ組織セラル」（第三条）と明文化している。<sup>15</sup> あきらかに「ホーリネス」の受容が教会員資格の要件なのである。

このように、ホーリネス運動は、メソジスト派におけるホーリネスあるいは完全論の回復を図った反面、教会性における包括性を失ったということができるのではないだろうか。

---

<sup>13</sup> 藤本満『ウェスレーの神学』福音文書刊行会、1990年、340頁

<sup>14</sup> 前掲書、335頁

<sup>15</sup> 「東洋宣教会日本ホーリネス教会第一年会記録」大正7年、11頁



### 3 中田重治とメソジスト

#### ホーリネス運動との出会い、その展開

中田重治がメソジスト・ホーリネス運動に出会ったのは、シカゴのムーディー聖書学院で学んだ時である。

中田は、メソジスト監督教会の伝道者として十字架の贖罪による「昔々らの基督教」を信じ伝道していた。一方で、東京英和学校でリベラル神学に触れて、聖書には誤りがあるとも信じていた。しかし、ムーディー聖書学院での学びにおいて、言語靈感に基づく聖書神言説に出会い、信じ受け入れるようになった。

また中田は、シカゴ滞在中、グレース・メソジスト監督教会で金曜日に開かれていたホーリネス（きよめ）の集会に出席した折り、同じ聖書学院で学んでいるC・E・カウマン、L・B・カウマン夫妻に出会った。

中田自身、渡米当初、カルヴァン派とメソジスト派の教義的相違やメソジスト派に、ホーリネスという「最高の教理」があることを知らなかったと語っている。<sup>16</sup> けれどもカウマン夫妻から、カルヴァン派との違いを聞き、学校の図書館でウェスレーの本を学ぶようになった。

つまり、中田重治は、アメリカで初めて、ウェスレーの完全論と出会ったのである。メソジスト派の伝道者であった中田にとって、それはアイデンティティの発見であったに違いない。

もちろん、そこで出会った「完全論」は、前述したように、祭壇神学における「ホーリネス」であるが、中田重治がその相違を把握していたとは言い難く、祭壇神学のホーリネスとウェスレーの完全論とを同一視してのことである。

中田はアメリカにおいて、メソジスト・ホーリネス運動におけるホーリネスこそが、メソジストの本質であると確信したのである。

中田とは別に、メソジスト監督教会内部でも、長崎の鎮西学院院長であっ

---

<sup>16</sup> 「きよめの友」大正13年10月9日、第923号、2頁

た笹森宇一郎や山田寅之助など完全論に共鳴する人もいた。そんな中、赤澤元造が初めて「キリスト者の完全」を翻訳している。一方、中田は多くのホーリネス関係の本を出しているにも関わらず、ウェスレーの「キリスト者の完全」は翻訳出版していない。

ところで、メソジスト・ホーリネス運動は、1890年代のカリフォルニアリヴァイバルを体験した川辺貞吉（後のフリーメソジストの代表者）や笹尾鉄三郎、松野菊太郎ら「小さき群」と呼ばれる人々によって、中田が渡米以前にも、もたらされていた。

しかし、彼らは、日本において、基盤となる組織を持たなかったために、ホーリネス運動を十分に展開できなかった。

また、日本のホーリネス運動の父と言われる、聖公会（C.M.S）宣教師B・F・バックストンも、松江にあって、「赤山塾」という小集団に限られていた。

それに対し、帰国後の中田は、メソジスト監督教会巡回伝道者としての立場を最大限に活用し、各地のメソジスト監督教会を拠点に、メソジスト・ネットワークを通して、メソジスト・ホーリネス運動が提示した「ホーリネス」を宣べ広めていったのである。

さらに、後に「きよめの友」となる「焰の舌」という機関誌を発行し、また相前後して、メソジスト監督教会会員、B・F・バックストンの影響下にある者、救世軍軍人、教文館の松野菊太郎らが加わった「聖潔の友（ホーリネス・ユニオン）」を結成している。

歴史に「もし」はあり得ないのだが、あえて、もし中田が弘前教会の出身者でなかったならば、もしメソジスト監督教会の教職者でなかったならば、これほど短時間に、日本全国でメソジスト・ホーリネス運動を展開できたか疑問であると指摘できよう。

### ホーリネス運動の受容

「アメリカにおけるメソジズムの伝統を中田重治がどう継承したか、これらは今後の検討課題である」という瀬尾の問いに、どのように答えることができるであろうか。

19世紀後半、日本から多くのメソジスト監督教会の留学生がアメリカに渡っているにもかかわらず、中田以外に、メソジスト・ホーリネス運動を紹介した者がいなかった理由を考える必要がある。

第一にそれは、少なくともメソジスト派内部で「完全論」が失われていたという、アメリカ本国の事情があるのであろうか。

第二は、このホーリネス運動が聖書神言説に立つ、第二次大覚醒運動の保守的な信仰理解に立っていたという事情があるであろうか。この点については、ティリッヒが「第二次敬虔主義運動」と表する流れに注目しなければならない。<sup>17</sup>

中田重治は日本ホーリネス教会の会則において「他ノ正統派ニ属スル諸教会ノ信ズル如ク旧新約全書ヲ以テ悉ク神ノ言ナリト信ズ」と述べている。つまり、一般的に正統主義と敬虔主義は対立すると言われているが、19世紀の第二次敬虔主義運動にあっては、むしろ、敬虔主義は、聖書の権威と十全性において、啓蒙主義（リベラル神学）と対立し、正統主義とは一致したのである。

しかし、最も神学的にリベラルと言われていたメソジスト教会にあっては、このような保守主義は非啓蒙的なものとして拒否されていたのではないだろうか。

中田は自らの立場を「初代メソジストの教義」と述べているが、ここで「初代」と語っていることに注目したい。そこでは、当時のメソジスト教会の有り様が、初代とは異なるとの認識があり、ここには「自分たちこそがメソジスト」というホーリネス運動特有の意識が表れているのである。

第三には、ホーリネス運動が、分派的な活動とみなされていたとも言えよう。確かに、メソジスト・ホーリネス運動は、メソジスト教会の「内外」で展開されていた。中田重治がアメリカに渡ったころは、メソジスト監督教会から分離する形でのホーリネス派の形成時期であった。そのような中で、中田はメソジスト派内部において、この運動に出会ったのである。

---

<sup>17</sup> P・ティリッヒ『近代プロテスタント思想史』新教出版社、1976年、209 - 214頁

### 組織形成とメソジスト

中田のホーリネス運動は、アメリカと同様の歩みを示している。つまり、メソジスト派内部の運動から、福音伝道館、東洋宣教会という超教派団体となり、ついには1917年の日本ホーリネス教会という教会組織の形成へと展開したのである。

日本ホーリネス教会の創立は1917年である。この年は、宗教改革から400年目という節目の年である。中田は、これを待って創立したとも言える。後に、ホーリネス教会は、(ローマ・)カトリックでもプロテスタントでもない。新プロテスタントである、と主張している。ここに、改革者中田の側面を見ることができる。

しかしそれと共に、必ずしも組織形成について、中田に明確な理念があったとは思われない。それは、日本ホーリネス教会が、創立当初から、メソジスト三派が合同してできた日本メソジスト教会の組織形態と規則の多くを準用していたことから伺える。<sup>18</sup>

実際、1933年に始まるホーリネス教会分裂事件において、中田の監督解任は、日本メソジスト教会の規則に従ってなされている。

また当初、中田は、監督は事務員であると繰り返し述べていた。<sup>19</sup> これは明らかに、監督職が「ビショップ」のような職位ではなく「スーパーインテンドント」(総督)であるとの理解を示しており、日本メソジスト教会の「監督」理解に一致する。

しかし一方で、教職任命権は、日本メソジスト教会が、監督と部長との協議によるのに対して、中田においてはメソジスト監督教会と同様に監督の専権事項であり、権限が集中していた。

さらに監督解任・教会分裂後に、中田は「規則は三つあれば十分」という趣旨の表現をもって、監督権の絶対性を主張することになる。

つまり、中田はメソジスト監督教会時代に理解し、また自らもそこに身をおいていた組織形態と運営を、ホーリネス教会に持ち込んだことが容易に想

---

<sup>18</sup> 「中田重治全集第六巻」、411頁

像できる。

ここで、日本ホーリネス教会会則についてもふれておきたい。会則第二条の前には「信条」という表記がある。しかし内容的には、わずか7条しかない、簡便なものである。これを教会の信条というには無理がある。ではなぜ、中田はそれを「信条」としたのか。これはメソジスト宗教箇条に相当するものか、宗教箇条に付加する内容と見るべきか、判断しかねるのが現状であり、なお検討を要する。

さらに、日本メソジスト教会の規則を準用したという場合、それはどのようになされたのか、宗教箇条（18箇条）が、日本ホーリネス教会において、なにがしかの意味・役割を持っていたのかも、なお明らかではない。

いずれにせよ、日本ホーリネス教会の脆弱さの一因として、中田に、教会規則や組織すなわち、教会法の視点が欠けていたことがあげられよう。

## 結論

中田重治は、日本にはじめて、メソジスト・ホーリネス運動を通して、ウエスレーの完全論を本格的に移植し展開した人物である。それは「ウエスレーの説きたるものと同じ」<sup>20</sup> という発言によって確認することができる。

ただ、その自覚と内実とに、多くの乖離があったことは、今日のメソジスト・ホーリネス運動研究において明らかとなってくる。

それにもかかわらず、完全論の紹介者・展開者であることに相違はない。これらのことから、今後の課題として二つが挙げられる。

第一は、中田のホーリネス運動を日本のメソジスト史の中に位置付ける視点が持てないものであろうか。またメソジスト・ホーリネス運動についての理解を深めることも大切であろう。

そこにおいては、日本のメソジスト史において完全論がどのように紹介・

---

<sup>19</sup> 「きよめの友」大正11年10月26日、第838号、1頁

<sup>20</sup> 「中田重治全集第七巻」、16頁

展開されたかを検証することになるであろうか。またメソジスト派とホーリネス派の自己理解、相互理解にとって有益であると思われる。

第二に、今日、日本でウェスレー・メソジストの伝統を生かす道として、教会の包括性を保持し、なおかつ「キリスト者の完全」を希求することが、課題として求められているのではないだろうか。

筆者が属する日本基督教団は、合同教会である。そこでは、ホーリネス体験あるいはホーリネスの教理は教会成立の要件でも、会員資格でもなく、教会としての拘束性はない。

教団信仰告白に「聖霊は我らをきよめて……」という一文があり、メソジストやホーリネスの伝統を顧慮してのことと言われている。しかしこれをウェスレー的な完全論として理解しなければならないと強要することは、決してウェスレー的とは言えないであろう。

つまり、合同教会にあってホーリネスを強調し、継承していくことは、教派教会以上に困難である。そうではあるが、ウェスレーの示す包括性を踏まえて、キリスト者のホーリネスを真剣に求めることによって合同教会の形成に寄与する一つのあり方が見えてくるのではないかと願わされている。

(日本基督教団都農教会牧師)